岡山県知事賞（高校・最優秀賞）

新聞感想文の部

勇気に共感

岡山市・朝日高１年　山内　宙

普段と変わらない眠くて憂鬱な朝。制服に着替えながら何気なく読んだ新聞記事は、そんな気だるい僕の意識を一瞬にして覚醒させるものとなった。

僕より二歳年上の十七歳のパキスタンの少女、マララさんへのノーベル平和賞授与。一見喜ばしいニュースだ。だが、記事を読み進めるとそこには、「暴力で教育を否定、人身売買、覆面の男に銃撃…」など、重く目を背けたくなる言葉が並んでいた。

マララさんは女子教育の大切さを訴え続けている。「初等教育の普及」や「児童労働の根絶」といった問題は、日本で生活しているとあまり意識しないことかもしれない。無理もない、日本の初等教育普及率は百パーセントだ。日本がいかに恵まれた教育環境にあるかを、記事の中で示された「主な国の初等教育普及率グラフ」での発展途上国との比較で、僕は改めて実感した。

少女の信念 世界共感

女子教育の大切さを訴えたパキスタンの少女マララ・ユスフザイさんへのノーベル平和賞授与が10日、決まった。あどけない笑顔を見せる17歳の少女が示した、銃弾の脅しにも屈しない信念が世界を動かした。勢力拡大を続けるイスラム過激派が暴力で女性や子どもの教育を否定する中、立ち上がった。偉大な勇気だが、理想の実現は遠い。（1面関連）

▼権利奪う

児童労働問題に取り組むインドの非政府組織（NGO）代表、カイラシュ・サトヤルティさん（60）との共同受賞となる。ノルウェーのノーベル賞委員会は2人への授賞理由をこう説明する。

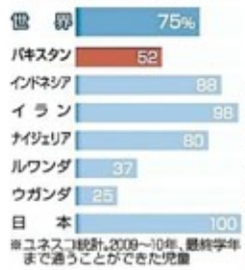
「過激派の抑圧と脅い、青少年の教育を受ける権利を追求する。2人は宗教や民族の違いを越え、共通の闘いに挑む。

ナイジェリアでは今年4月、イスラム過激派ボコ・ハラムが女子生徒200人以上を拉致。マララさんは7月の誕生日に合わせて同国を訪れ、被害生徒の親や事件直後に脱出した生徒と面会し「今年の誕生日の願いは、私たちの少女を無事取り戻すことだ」と訴えた。イラクとシリアでも、過激派イスラム国が少数民族の女性300人を拉致、人身売買がまかり通る。

サトヤルティさんの主な活動の

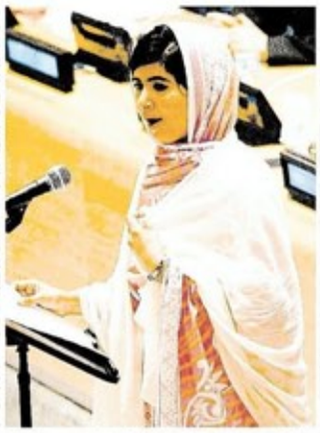
マララさんノーベル平和賞

主な国の初等教育普及率



※ユネスコ統計、2009～10年、最終学年まで通うことができた児童

差別常態化 遠い理想



2013年7月、国連本部で演説するマララ・ユスフザイさん（共同）

一つは児童労働の根絶。世界に1億6800万人もいるとされる労働に従事する児童は、教育を受ける権利が奪われている。

2009年ごろ、イスラム武装勢力「パキスタンのタリバン運動（TTP）」が女子教育の停止を布告。マララさんは英BBC放送を通じ、実態を伝え始める。

「あすから冬休みだが校長先生は新学期がいつ始まるか言わなかった」「男たちおまえを殺す」と言われた。

12年10月の下校中、通学バスに乗り込んできた覆面の男に銃撃された。

▼続く恐怖

TTPは当時、「シャリアイスラム法）に反する運動をする人物を殺すのは当然のことだ」と犯行を認めた。パキスタン軍が今年9月、銃撃犯ら10人の逮捕を発表したが、過激派への恐怖はぬぐい去られていない。

マララさんが襲撃されるまで住んでいた北西部カイバル・パクトゥンクワ州スワト地区では、政府が地元の学校名をマララさんにちなんだものに変更する計画を示すと「標的となりかねない」と生徒が抗議した。

今年1月には、同州の別の学校に自爆テロ犯が侵入。14歳の少年が身を盾にして防ぎ、自ら犠牲となって多くの生徒の命を救った事件も起きた。

▼最良の道

マララさんは以前、米テレビのインタビューで「私が成し遂げたい本当のゴールは、すべての子どもが学校に通えるようになることです」と話した。だが現実は厳しい。

国連教育科学文化機関（ユネスコ）によると、パキスタンで初等教育を受けられない子どもは約337万人（12年推定）に上り、うち6割近くが女性だ。農村部を中心に「女性は家庭に入るべきだ」との考えが根強く、教育への理解が浸透しているとは言い難い。

女性人権活動家のタヒラ・アブドラ氏は「パキスタンの教育は緊急事態に直面している。マララさんは教育の権利擁護への関心を高めたが、状況を変えるには20年以上にわたる継続的な努力が必要だ」と指摘している。

小学校に通えない女子は世界で推定約3100万人、中学では約3400万人に上る。アジア、アフリカの広範囲で女性差別が常態化している。

「教育を平和構築の努力の一部とすることが、暴力の連鎖を止める最良の道だ」。オランダの人権団体が昨年、マララさんに「国際子ども平和賞」を授与した際、ユネスコのイリナ・ボコバ事務局長はこう言い切った。（イスラマバード共同＝大倉恭之）

2014年10月11日付　山陽新聞

さらに記事では、マララさんが身を置いている過酷な現状を伝えると同時に、「パキスタンでは女性は家庭に入るべきだという考え方が根強く、教育への理解が浸透しているとは言い難い」との記述があった。

僕は読み進めながら、小学生時代を過ごしたエジプトでのことを思った。エジプトで生活をし始めてすぐ、僕と背丈の変わらない少女が、路上でティッシュを差し出してきた。戸惑いつつも「今はティッシュ要らないから、もらう必要は無いな」と思い、受け取らなかった。後になって、ちょっと強引に差し出されるティッシュは商品であり、幼い彼女らがわずかな収入を得る術なのだと知った。

僕と年齢の変わらない彼ら彼女らは、学校へも通っていなかったのだろう。日本の恵まれた環境について思う時、日本の豊かさを思う時に必ず思い出すのは、エジプトの路上ですれ違った彼ら彼女らのことだ。家計の手助けだったのか、その家族すらいないのか…。彼女たちにとって学校へ通うなど、夢のまた夢なのか…。僕は、まだ父と兄が二階で寝ている平和な家の中で、静かに考え続けた。

「一人の力で何かが変わるわけではない」と言う人がいる。確かに、七十億人が暮らすこの地球上で一人の力はものすごく弱くて小さいものだ。だが、この記事の見出しに心を揺さぶられた人はたくさんいたはずだ。『少女の信念　世界共感』。マララさんへのノーベル平和賞授与の記事を読みながら僕は気づいた。「誰かが変わらなければ何も変わらない」と。「誰かが変われば、誰かを変える」と。

生々しい記事の内容から目を背けたくなったと前述した。だからこそ目を向けなくてはいけない。それこそが、マララさんの勇気に共感した僕が、今この時からできることなのだから。

寸　評

ノーベル平和賞授与の記事を読み、世界を動かしたマララさんの強い信念に共感。自身の海外経験で感じたことを交えながら自らの問題として考え表現しており、説得力のある内容です。

2015年2月21日 山陽新聞朝刊 102ページ　(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。